

学会報告

設立20周年を迎えた農村計画学会

合田 素行

2002年4月6(土),7日(日)農村計画学会が東京大学農学部で行われた。6日の午前中はポスターセッション,翌日が個別報告である。ポスターセッションは六つのセッション計41のポスターが展示され,それぞれ熱の入った説明と質疑が行われていた。久しぶりに学会に参加した私には,ポスターはどれも美しい図や写真・絵で構成され,白黒,文字だらけのポスターの時代からは隔世の感である。

今年は学会設立20周年にあたり,いろいろな催しが企画された。興味深いものの一つが,学会誌掲載論文をすべて納めた1枚のCDで,受付で配布された。これは非常に便利で,他の各学会もこれを真似すればいいのにと,バックナンバーを苦労して探すことの多い,日頃整理の悪い筆者は強く思ったことだった。もっとも,ホームページに載せれば,という声もないではないが,例によって著作権や盗作の問題などが思い浮かび,情報公開や自由アクセスという便利さとのアンバランスが生じる。むずかしい問題である。以下,20周年記念として6日午後弥生講堂で行われた国際シンポジウムについての印象を報告しておきたい。

国際シンポジウムと言っても,日韓の農村計画学会の間で3年前,研究協力協定が結ばれ,1昨年韓国京城(ソウル)の南,水原(スワン)で第1回日韓農村計画学会国際シンポジウムが持たれたことに続き,その第2回

として行われたものである。前回は,「21世紀の農村計画と農村環境改善の方向」と題し,日本から5人の学会関係者が招待され,その中から学会会長の基調報告と2人の30分の報告を行った。

今回のテーマは,「農村の虚像と実像 農村計画への期待」と題され,第1部は,「海外からみた日本の農村,日本からみた海外の農村」,第2部が,「現場からの報告,農村計画研究への期待」としてそれぞれ3人からの農村計画研究への注文を聞く形,そして第3部で,「農村計画研究の立場から現場の計画へ」と題して,これまでの学会会長経験者が,その注文を受けて発言する,というなかなか凝った組み立てであった。もちろん筋書き通りに行くわけではなく,かなり一般的なやりとりで終わった感もあるが,筆者の感想を一つだけ述べておきたい。

シンポジウムの趣旨を文字通りに読むと,農村計画研究の対象は,実は農村の虚像ではないのか,という問題意識である。これに対して,外国人報告者の「農村ってなんでしょう」という疑問が,その問題意識にすっかり対応したものであったように感じられた。後に続く他の報告者も何人かはこの文句を用いたし,司会者も最後にこの言葉を漏らしていた。20年の学会の活動を傍見してきた身には,農村の虚像という描像を見ながら,学会はこの間に大きく変貌してきた農村の実像についての問いを発することが少なかったのではないかと,との思いが今更ながら強い。

確かに農村とは何か。個人的には農業的土地利用が主で比較的人口密度の低い地域,といった漠然としたイメージだけだったが,今回の報告を聞きながら,農村というのは実体的な概念というより,たとえば自然との交換・交感が積極的に行われるところといった機能的な観方がしっくりするような気がしてきた。農村計画はそこに社会的,経済的活動を組み込むのだけれど,その場所はこれまでの農村ではなくてもいいのである。